

GS 群団底力編

# このまちに 生きる

成功するまちづくりと地域再生力

篠原修・内藤廣・川添善行・崎谷浩一郎編

金山町  
山形県

小布施町  
長野県

竹富島  
沖縄県

宇治市  
京都府

内子町  
愛媛県

彰国社

## はじめに

大災害は未来を手前に引き寄せます。何も起こらなければ数十年後に起こってくるようなことを十年後の近未来に呼び寄せる、といった具合です。日常の裏に隠された問題が一举に浮上してきます。

平成二十三（二〇一一）年の三・一一が明らかにしたことは、既存の縦割りの制度がいかに時代遅れで、緊急時には役に立たなくなっているかでした。平時では見えない社会システムの実態が白日の下に晒されました。港湾、河川、道路、都市、建築、森林、農業、漁業、文化財など、何も起こらなければ、われわれの見えないところで、粛々と法律と補助金の組合せで個別に事業が進められていたはずですが。

しかし、未曾有の大災害が起き、それに短期間で対処するには、何とか取り繕ってきた日常の仕組みの延長では対処できるはずがありません。これら諸分野の有機的な連携と強力な一体化が求められました。被災された方にとって、取り戻そうとする暮らしは一つだからです。しかし、事態は皆さんご存知のとおりです。

われわれGS (ground scape) デザイン会議は、建築・都市・土木に関わる専門家の集団で

す。第二次世界大戦後、経済復興と高度経済成長をするために生み出された縦割りの社会的な仕組みが老朽化し、すでに賞味期限が切れているのではないか。この活動を平成十七(二〇〇五)年に篠原修さんとともに立ち上げたのは、そのことに大きな危機感を持ったからです。

すでに高度成長は望めず、人口はピークを過ぎて、これから長期にわたって経済は減速し、人口は減っていきます。新しい時代が訪れつつあるのです。縦割りと横連携を組み合わせた新しい時代の新しい仕事の仕方が求められています。はからずも、三・一一はそのことを明らかにしたのです。

われわれの活動は多岐にわたって広がっています。重要な活動の一つとして「GS連続シンポジウム」があります。縦割り行政と戦い、素晴らしい成果を上げている専門家に来ていただき、講演とシンポジウムを開催してきました。本書に収録した平成二十一(二〇〇九)〜同二十二(二〇一〇)年にわたって行われた講演・シンポジウムも、毎回、とても貴重な現場からの知見を伺うことができました。どのケースも例外なく、中心になる方の強烈な人間的な魅力があり、それが周囲の人を惹き付け、制度を越えた人の輪、つまり、より大きな状況を生んでいく、ということがわかりました。立場もさまざま、場所も事情も多種多様ですが、共通しているのは「人間力」と「状況力」です。

われわれも講師の方たちから、多くの教訓と勇気と元気をいただきました。それをより多く

の方と共有したいと考え、出版することになりました。会場の熱気とともに、このなかにある新しい時代の萌芽を感じ取っていただけたら幸いです。

平成二十四年十一月吉日

内藤 廣

はじめに	内藤廣	3
1 30年でなしたこと、100年でなしてゆくこと(山形県 金山町)	鈴木洋	8
まちづくりの主役は町の人たち	鈴木洋	12
“生活環境の向上”をベースにして	片山和俊	22
パネルディスカッション	鈴木洋・片山和俊・林寛治・住吉洋二・岸三郎兵衛・江川直樹・中井祐	42
2 受け継いできたもの、残してゆきたいこと(長野県 小布施町)	市村次夫	66
新しいものと古いものに折り合いをつけていく	市村次夫	70
ホンモノへのこだわり	セーラ・マリ・カミングス	90
パネルディスカッション	市村次夫・セーラ・マリ・カミングス・宮本忠長・林寛治・加藤源	106
3 うつぐみの心が紡ぎ出したもの、育ててゆくもの(沖縄県 竹富島)	上勢頭芳徳	122
文化の刷り込みで景観を守る	上勢頭芳徳	126
離島で生き抜くためのデザインソース	西山徳明	148
パネルディスカッション	上勢頭芳徳・西山徳明・桑子敏雄・市村次夫・中井祐	166
4 脈々と流れる都市文化、これから積み重ねる町並み(京都府 宇治市)	木下健太郎	184
歴史とお茶のまちづくり	木下健太郎	188
お金がないからソフトで勝負	中西敏	208
パネルディスカッション	木下健太郎・中西敏・井上典子・西山徳明・中井祐	228
5 町並みを守り、村並みを育てる(愛媛県 内子町)	岡田文淑	246
負の要因を減らす “引き算型”のまちづくり	岡田文淑	250
地域づくりは七年以上	亀田強	272
パネルディスカッション	岡田文淑・亀田強・木下健太郎・中井裕・篠原修	277
シンポジウムを終えて	川添善行	302
まちなみ三十年説とまちの物語	篠原修	315
おわりに	篠原修	315

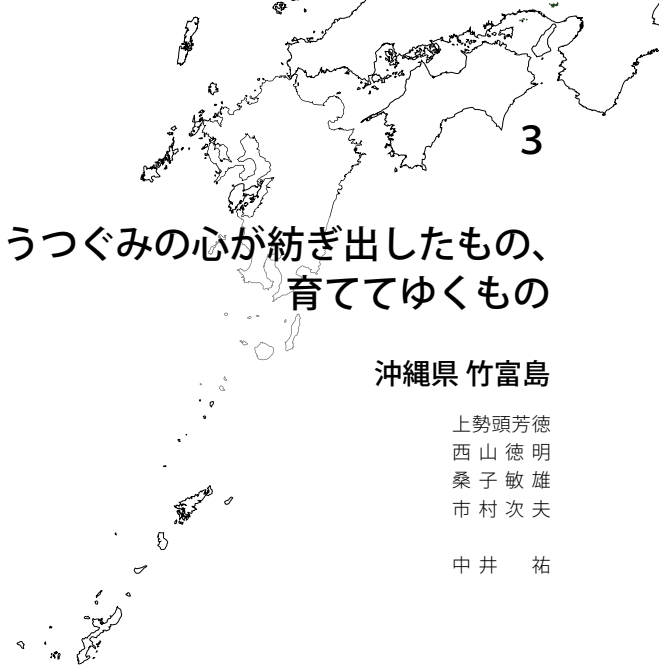


# うつぐみの心が紡ぎ出したもの、 育ててゆくもの

## 沖縄県 竹富島

上 勢頭 芳徳  
西 山 徳 明  
桑 子 敏 雄  
市 村 次 夫

中 井 祐

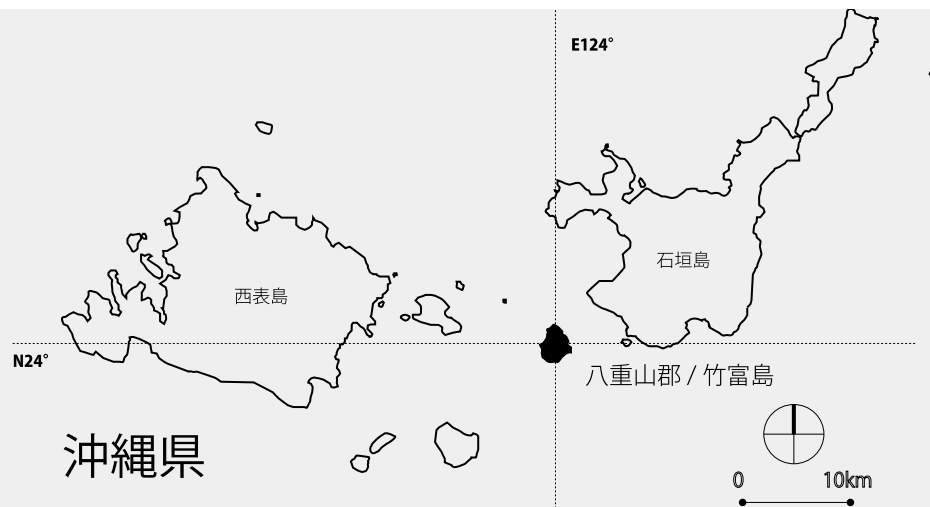


沖縄本島から南西に約四三〇km、石垣島からは高速船でわずか十分の距離にある竹富島は、司馬遼太郎が「カレー皿を伏せたような島」と記したように、とにかく平坦で起伏が少なく、山も川もない島である。島の周長約九km、人口三五〇人ほどのこの小さな島に年間四五万人もの観光客が訪れる。訪れた人が見るものは、赤い瓦屋根に白砂の道、珊瑚石灰岩の石垣、豊かな緑、そして青い海と空。それだけだ。ごまかしのない風景がここにはある。南国らしいゆったりと時間が流れる竹富島だが、その穏やかさの陰には多くの苦勞が積み重ねられてきた。

十七世紀の薩摩藩の琉球侵攻、明治政府による廃藩置県、戦後のアメリカ支配など、竹富島は外からの力に翻弄される時代が長く続いた。ようやく昭和六十一（一九八〇）年に本土復帰が果たされると、今度は外部の企業による開発の手が伸びはじめ、実に島の二割以上の土地が買い占められてしまう。危機感を感じた住民は「竹富島を生かす会」を結成。この住民運動がきっかけとなり、町並み保存の機運が高まっていくことになる。

「汚さない」「汚さない」「乱さない」「壊さない」「生かす」。紆余曲折を経て昭和六十一（一九八〇）年に定められた「竹富島憲章」は、今なお続くまちづくりの基本理念である。同六十二（一九八七）年に集落全体が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、さらなる観光化の波が押し寄せるなか、町並み保存の姿勢は失われなかった。

竹富島は、現代の日本の町の町が追求してきた利便性とは無縁である。しかし現在の島の人口の三分の一は島外から移住してきた人たちだという。ありあまる自然や文化の豊かさが利便性を凌駕し、そして何より日本人の忘れかけていた「うつぐみ」（共同の意味）の心に入々は惹き付けられるのである。



## 文化の刷り込みで景観を守る 美しい島を維持する地域力

上勢頭芳徳（喜芳院菟集館）



上勢頭芳徳（うえせど・よしのり）

「人の人生を変えてしまうような恐ろしい島です」。上勢頭氏は朗らかに笑う。35年前に竹富島に移住した上勢頭氏を待ち構えていたのは、島の文化を守るための闘いであった。伝統や文化の継承には、それを守る強固な意志が必要である。やわらかな物腰と朴訥とした物言いの奥に、戦いの実践に裏打ちされた魂の叫びを感じずにはいられない。

### \*方言を大事にする心が景観を守る\*

され され くやーなら。なーら紹介しうけつたる 沖縄ぬ 竹富島（てーどうん）はら来つたる上勢頭ぬ芳徳ゆ。どうでいんてい見つし給うてい願いしつしやるなら（笑）。竹富島の方言で、「今紹介していただいた沖縄の竹富島から来ました、上勢頭芳徳です。どうぞお見知りおきください」と話したところだ。

まあ、耳で聞いただけではよその国の言葉に聞こえたかもしれないが、私たちのところは、沖縄本島からさらに四三〇km、つまり東京から二、一〇〇kmぐらいい離れたところだ。

それにしても、何でわざわざ皆さんが理解できないような方言で挨拶したかといいますと、文化は辺境に残るといわれるように沖縄の言葉が古い時代の日本語という説があります。それに最近、地方の文化を大事にしようとか地域文化の復権なんて言われたりします。地方分権などということも言われたりしておりますが、それでは地方の文化の一番の大もとは何だろうということになったら、それは言葉、方言ではないでしょうか。

戦前は沖縄差別というのがあったようで、方言を使ったら罰として

## 離島で生き抜くためのデザインソース 〜美しい風景をつくる三つの要素〜

西山徳明（九州大学）



西山徳明（にしやま・のりあき）

若かりし頃、竹富島に魅せられた研究者の卵は、偶然の出会いを経て、建築の専門家として、研究者として20年近く島に通い続ける。その眼差しの先にあるのは竹富の美学を探るという表層的な調査や研究では決して導くことのできないテーマであった。関与してなんぼの西山スタイルで挑み続けてきた足跡を、島への恩返し気持ちとともに語る。

### \*竹富島に変えられた研究者人生\*

上勢頭さんから、島に人生を変えられるという話がありました。私も人生を変えられたうちのひとりです。私は大学時代、海が好きで、沖繩が好きで、毎年夏休みに友だちと一緒に沖繩に遊びに行きました。三年生のとき、八重山諸島の竹富までたどり着いて、ビーチで泳いで遊んでいたんです。地元民の民宿に泊まって、朝起きて「さあ、今から海に遊びに行こう」と思ったら、むさくるしいジープンをはいた大学生が私の泊まっている民宿の庭を調査している。それが幸か不幸か京大の三村研究室<sup>\*1</sup>——自分の大学の先輩だったんです。それですつかり、「こんなところで研究できるような研究室があるのであれば、そこに入るしかない」と思いました（笑）。

研究室に入った後、当然ながら、先生に「僕は竹富をやりに来ました」と申し出ました。そうしたら、京都の大学の研究室ですから、先輩は全員、京都の景観とか京都の都市計画の研究しかしていない。実は三村先生が自分の趣味でしていた研究が竹富だったんです。それも復帰前から。それで、「酔狂なヤツが来た!」というので三村先生は大喜びで（笑）、過去のデータを全部私の机の上に積み上げて、「あと

## ハネルデイスカッション

既出 上勢頭芳徳  
既出 西山徳明  
東京工業大学 桑子敏雄  
小布施堂 市村次夫  
進行役・中井祐

\*町並みゼミの同期生として\*

中井 上勢頭さん、西山先生、お話ありがとうございます。ざいました。まずは市村さんと桑子先生に感想をいただいて、それから議論に進みたいと思います。市村 上勢頭さんからお聞きして感慨深いのは、竹富が初めて参加されたのが東京で開かれた第五回町並みゼミだということです。実は私も小布施町の職員も第五回に初めて参加しました。

なぜそういうことになったかというと、小布施は北斎館という美術館をつくつたら、観光施設としてつくつたわけではないにもかかわらず観光客が来るようになった。また、ちょうどその頃、わ

れわれ栗菓子屋も製造販売以外に飲食業などの店舗展開を始めて、予期せぬ観光地化が進んでいた。それで行政に「今後、景観を整えるときには、もつときつちり日本のほかの町、特に町並み保存運動の方々はどう動いたかを行政は行政で勉強してほしい。もちろん民間も勉強するけれども、一緒に勉強するのはやめよう。それぞれ立脚点が違うんだから」と申し入れました。それで町は町、われわれはわれわれで参加したのが第五回町並みゼミだったものですから、竹富島も第五回からという話を聞いて、「うくん、同期生だ」とうれしくなりました。

\*守り続けられる沖縄のアイデンティティ\*

桑子 上勢頭さんと西山先生のお話を伺っていて、思い出がよみがえってきました。西山先生も「人生が変わつた」と言われましたが、考えてみると、私も竹富島がちょうど人生の節目に当たっていた。私は一度だけ、昭和五十三（一九七八）年に伺いました。そのとき私は、哲学という学問で本当に食っていけるんだろうかという不安のなかで研究をしながら、東大の哲学科の助手に就職できて、初めて給料をもらったんですね。それで記念にどこかに行こうと家内と相談しまして、沖縄本島、石垣、竹富に行きました。

竹富を訪れまして民宿に一泊しました。ちょうどお盆の頃だったと思います。神様にお供えする、赤いおもちかおまんじゅうがありますね。それを民宿のおばあちゃんにいただいた記憶があります。岬のほうに行くと、その日はちょうど大潮で

リーフの向こうのほうまで潮が引いておりまして、リーフの近くに行くとき急に切れ込んで深くなっていて、そこを黒潮がごうごうと音を立てて流れていたのを思い出します。本当に素晴らしい、記憶に残る場所ですね。

その風土にあわせて島の文化が育まれてきた。上勢頭さんが「うつぐみ」という言葉を使われましたが、私は初めて聞いた言葉です。要するにみんなが協力しないと生きていけない、というところがタイプなんですけれども、協力することによって、それをむしろポジティブな地域のあり方にしていく、そういう素晴らしい言葉だと思います。ですから、うつぐみという言葉はおそらく風土とそこに形成される文化と両方に深く関わっているんだらうと思います。

一つお聞きしたいのは、水との付き合い方です。やはり地域を見るとときには「水の流れ」というも



## まちなみ三十年説とまちの物語

川添善行

## 生き生きとしたまちなみ

原稿にふと行き詰まり、私はいつもの鞆を手列車に乗った。行き先は日本を代表する企業城下町。新しくできたばかりの駅舎は、時代を代表する世界的建築家の手によって設計されたものだ。駅前には、不思議な立体を組み合わせたようなシビックセンターがあり、時間は経過しているが、こちらも日本の建築界を代表する設計事務所による。整然とした街路は、フランスのブルヴァールのような幅広の歩行者空間を備え、立派な桜並木が美しいアーケードをつくり出す。産業としても、大企業の牽引力もあつてか、小さなまちにとつてはじゅうぶんの雇用があるようだ。ただ、一度まちなかを歩いてみると、寂寥せきりょうとした空気が整然とした街路樹のあいだを吹きすさぶ。どこかよそよそしい雰囲気がかまを支配する。随所に見られる広場のような空間では、多くの通行人が通り過ぎるものの、そこで佇んだり、言葉を交わす人はいない。そのとき、私は自分のなかに微かな違和感がよぎるのを認識した。都市空間のデザインも、建築家の試みも、産業振興も、従前の都市

デザインの考え方では、いずれも及第点以上の成果を出している。近代的な都市デザインとしては、模範解答にも思えるこのまちに、これ以上、私は何を期待しているのだろうか。私のなかに生じた微かな違和感はいったい何に起因しているのか。そのとき、私を感じたのは、どうしてこのまちは生き生きとしていないのか、ということだった。

「生き生きとしたまちなみ」は、どのようにして生まれ、どのように存在しているのだろうか。この本を通して、私たちが伝えたいメッセージはそのひと言に尽きる。生き生きとしたまちなみということ、美しい風景とは異なる。整ったまちなみ、ということとも違う。それはある種の状態のことであり、何をすれば実現されるという画一的な指標があるわけではない。そうしたことを考えようというのだから、本書はなかなか大変である。すでにまちなみの保存や都市デザインの手法に関しては、相当量の知識と経験の蓄積がなされてきた。それはひとえに先人たちの挑戦と試行錯誤の結果もたらされたものであり、私たちはそれらから多くのことを学びうる。とはいえ、歴史的価値のあるまちだけがすぐれているのではない。一流の設計者による作品があるエリアだけが大切なのではない。それらとは違う、もっと大切な価値観があるのではないか。もっと身近なところにも、大切にしたいまちなみは存在しているのではないか。それをわたしたちは、「生き生きとしたまちなみ」というのである。美しさや歴史的価値だけでは評価することできない、新しいまちなみの捉え方。その新しい価値観を少しでも捉えることができればと思っている。